

## コラム 48：アメリカの旅 その2 (2015・12・8)

約 25 時間—これが今回の旅で私たちが飛行機に乗っていた時間です。妻が旅行社で見つけてきたのは、「ロス～ハワイ 7 日間の旅」 福岡空港発で羽田経由の飛行便でした。ホテルと飛行便の予約と、飛行場とホテル間の送迎のみで、観光や食事も付いていない全くのフリープランです。友人と会うことが主な目的の私達には、それはそれで良かったのですが、旅行日程は 7 日間でも、実質的に動けたのは、ロスが 2 日でハワイは 1 日の計 3 日間のみ、ということになってしまいました。

「どうしてそんなアホな旅行日程にしたんか」と思われそうですね。夜中に到着、午前中に出発という日程であったことと、飛行機の離着陸は時間がかかりますから、結果的にこうなったのですね。どうせ行くなら、もう少しゆっくりと旅を楽しめばと思ったのですが、私のイチゴ栽培や、我が家の「ジャジャ馬犬」のベリーちゃん、そして私と妻双方の、年老いた母親の事がありましたので、あまり長く日本を離れるのは不安があったのですよ。しかし、終わってみるとそれなりに充実した 3 日間を過ごしたようで、私も妻も満足していますね。

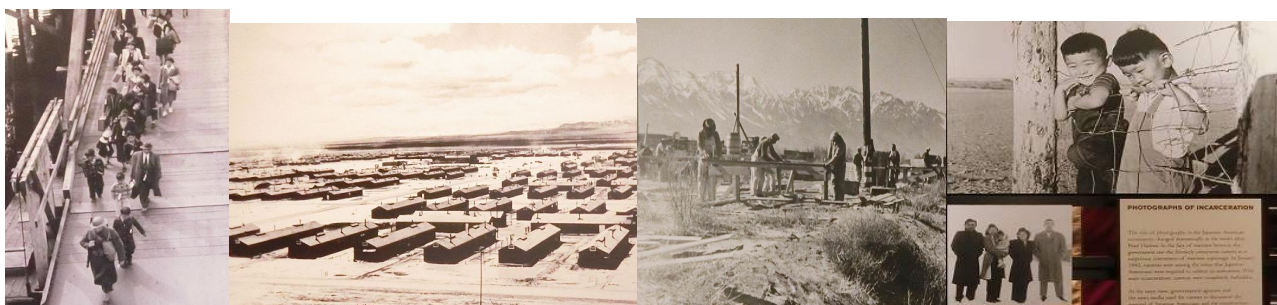


米国 LA(ロスアンゼルス)時間 10 月 1 日午後 1 時  
JAPANESE AMERICAN NATIONAL MUSEUM  
全米日系人博物館

そこは偶然にもリトルトーキョウの私たちが泊まったホテルの、すぐ近くにありましたね。1999 年に新しく落成し開館したという博物館は、全面ガラス張りのモダンな建物。ここには戦前から戦中にかけての、アメリカ社会における日系人に対する差別と迫害の歴史の資料が展示されています。大戦中の強制収容所への隔離と、日系人部隊の活躍、戦後の市民権の回復が主な内容ですね。日本語の解説のテープを聞きながら一回りして、30 分から 40 分位かかったでしょうか。私はだんだんと腹がたってきましたね。

日米開戦後、ロスアンゼルスで平穏に暮らしていた 12 万人の日系人は鞆一つを持って、行先も告げずに列車に押し込まれるのです。着いたところは LA から 300 キロも離れた砂漠の中。そこは昼間は 40 度以上、夜は零下になるという過酷な環境です。その温度差のために収容所の壁板は歪んで隙間だらけになっています。まわりに鉄条網が張られた、そんな環境の中で、彼らは農業をし、学校を作って、厳しい生活をしいられたのです。当時のアメリカ政府は、ナチスドイツのユダヤ人迫害に近い行為を、日系人に対してやったのですね。唯一違ったのは、虐殺のためのガス室がなかっただけ。写真の下にこんなコメントがありました。

We had never done anything wrong 私たちは何にも悪いことをしていないのに



強制収容所に入れられた日系人は、殺されなかった代わりに、祖国日本と戦う米国に忠誠を誓うことを要求されるのですよ。応召してアメリカの兵隊になり、そのことを命を懸けて証明しろという

わけです。彼らは主に欧州の戦線で活躍し、勲章を沢山もらった代わりに、死亡率も格段に高かったようです。Go for Broke!などという英語がありましたが、「アタッテ砕けろ！」とでも訳すんでしょうか。当時の日本の軍隊がよく使った「玉砕」(ぎょくさい)という方がいいのかもしれませんが。自分と家族、そして日系人がアメリカ社会で生きていくために、まさに彼らは死ぬ気で戦ったのでしょうか。南方戦線にも送られたようですが、どんな気持ちで日本兵と対峙したのでしょうか。Yankee Samurai ヤンキーサムライ という言葉が書いてありましたが、彼らはそう呼ばれたのですかね。



この日系人の強制収容所については、戦後ずいぶん後になって、アメリカ政府は謝罪と補償をしているようですが、<なんぼ戦争中じゃ言うても、アメリカもヒドイことをしたもんよ>というのが、私の正直な感想です。同じ敵国であったドイツ系やイタリア系の移民には、そのような「国家的な迫害」はなかったようですし、これはアジア系有色人種に対する「人種差別」と、「真珠湾攻撃」への恨みが日系移民に向けられた、と考えるべきだと思いますね。

館内の資料を見終って入り口付近にいと、マーシャが呼び止めました。「あそこのリサーチセンターで<彼>のことを聞いてみたら？」そうです！私がここに来たのは、<彼>のことを調べることが目的だったのです。私は左奥にある部屋に入って行きました。そこはかなり広い資料室になっているようで、四方の壁一面に図書館のごとく本棚が並んでいます。入ってすぐの所に小さなカウンターがあり、日系人らしき若い女性がパソコンに向かっていました。

私は<彼>の事を調べてほしい旨を伝えようとして、彼女に日本語が通じないことに気づきました。<ここは日系人博物館なのに日本語はダメなんか>と思いつつ、仕方なく自信のない英語で、<彼>の名前や死亡日時や年齢などを言います。マーシャが側に来て、補足をしてくれました。彼女はしばらくパソコンを叩いていましたが、顔を上げると「No records」(ノーレコーズ) と言。どうやら、「記録が残っていない」という意味のようです。マーシャがさらに聞いています。そして、すまなそうに私に向って、「ゴメンね。戦前の人の記録は残っていないらしいの。彼は House (収容所) に入っていないかったの？」「戦争の前に亡くなっているから、入っていないと思うよ」どうやら、ここは強制収容所に入っていた人の記録が中心のようです。



ここで<彼>についての説明が必要ですね。その人は、私にとって母方の曾祖父に当たる人です。詳しい経歴はほとんどわかりません。わかっているのは三つだけです。結婚後すぐに渡米し、戦前のロスアンゼルスで長く働いていたこと。1940年6月にロスで事故死していること。そして年齢は今の私と同じ66歳であったこと、それだけなのです。彼がどんな仕事をし、何処に住んでいたか、どれくらい米国にいたのか、すべて不明なのです。

私が彼の存在を知ったのは定年退職後のことでした。母に3枚の写真を見せられたのです。一枚は写真館で撮ったと思われるポートレート、もう1枚は西洋風の家の前立っているスナップ写真。いずれも年齢や撮影日時は不明ですが、か



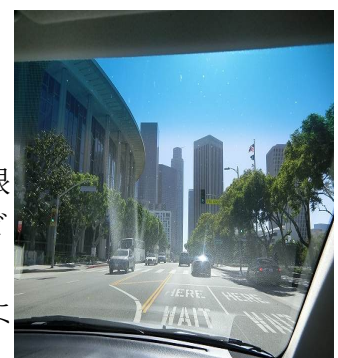
なり若い頃のもののようです。そしてもう1枚は、B-5サイズのロスでの葬儀の参列者の写真。背景に映っている建物のガラスに「707 JAPANESE UNDERTAKING CO. 日本人葬儀社」という文字が見え、参列者は50人程度でほとんど日本人ですが、白人の姿も見えます。

戦前の日系人に対する風当たりの厳しい時代に、米国で働き、私が生まれる8年も前に事故でなくなった曾祖父。それから、私はその男の存在が、妙に気になりはじめたのです。母の話では「仕事中に劇薬を扱っていて、起こった事故らしいよ」と言う事ですが、それ以上の事はわかりません。母自身も、祖父である<彼>に会った記憶がないというのです。言葉の問題もあり、当時の日系人に廻ってくるのは、3K(きつい、危険、汚い)の仕事しかなかったであろうことは想像できます。「戦前の記録はどこにいけばわかるのか」「事故死の内容について調べられないのか」そんなことを、もう少し聞いてみるべきでした。私の英語力の欠如もあり、これ以上の追及が出来なかったことを、今になって悔やんでいます。75年も前に、ロスの青い空の下で生き、図らずもこの地で逝った、私の「ご先祖さん」のことを、この機会にもう少し知りたいと思ったのですが……。

今回の旅が決まった時に、私が一番気になったのは私の英語力でした。観光パックであれば、ガイドさんについてゆけばいいのですが、今回の旅では、ほとんど個人的に動くことになるので、英語を話すことは避けられないのです。心配性の私が「大丈夫じゃろうか」と妻に言うと、「マーシャは少し話せるはずだし、そんなこと行けば何とかなるもんよ」という返事。日系三世というのは、米国で生まれ育っている完全な米国人ですから、日本語を話すことは無理だと思うのですが、彼女は根っからの楽道家、全く気にならない様子なんですね。

「はいじゃあ、ワシがやるしかないのう」というわけで、とにかく3か月くらい前から「英会話学習」を始めたわけです。そうは言っても、今さら机の前に座って、英語の勉強をする気持ちにはなりません。そこで思いついたのが、ハウスで作業をしながら英会話を聞く、という「ながら学習」ですね。内容は、かなり昔にやっていたTV英会話や映画の録音テープです。この短期間で英語力が飛躍的に上達したわけではないのですが、耳を慣らすことで、英語的な発音が少しは身に着いたと思いますね。今振り返ってみると、英語を話す上で一番大切なことは、文法は間違っても「とにかく伝えてやる」という気持ちの方が大切だと感じました。今までの66年間の人生の中で、英語を話して暮らしたことはないのですから、「流暢な英語を話す」ようなことを望むのは、所詮無理なのです。私達の英語力がアヤシイことをわかっているマーシャが、大事なことを伝える時に、スマホの翻訳ソフトを使って、日本語訳を私達に見せてくれたのは、ずいぶん助かりましたね。

日系人博物館ですごしたのは1時間余り、レナードの運転する車はダウンタウンを通過してフリーウェイに入り、the Pacific Ocean 太平洋に面したサンタモニカを目指します。ロスの高層ビルの近くに来た時に、彼が聞いてきました。「LAでは前に大地震があつてから、高層ビルを建てる制限が厳しくなって、建てられなくなったんだ。東京は地震があるけど、高層ビルが沢山あるよね。Why? どうして」何と答えていいか、わかりませんでした。日本の建築技術がアメリカより進んでいるとは思えないですし、答えようがないですね。「I don't know why」(どうしてだかわからないよ)



フリーウェイを走ること30分程度で、サンタモニカに到着。このあとベニスビーチまで足を延ばして、5人でしばし海辺の散策。通りの両サイドには、服や土産や絵画の露店が並び、なかにはTattoo 刺青屋(?)など書いたワケのわからぬ店も。そしていたる所でPerformer パフォーマーが歌や演奏や曲芸をやっています。要するに彼らは日本でいうところの「大道芸人」ですね。根っからの「目立ちたがり屋」ですから、私達はPeople Watching 人間観察を、しばし楽しんだのです。



私は買ったばかりの一眼レフ CANON EOS で、遠慮なくバシャバシャ撮りまくりました。とにかく、そこらじゅうに「オモロイ人間」と「アメリカ的な風景」が転がっているという感じなのです。黒人のラップシンガー、アフロ金髪のジャズピアノ、筋肉モリモリの Bodybuilder ボディビルダー etc、……マーシャが何やら心配そうに側で見ているのですが、どうもトラブルを気にしていたようです。後で気が付いたのですが、「NO PHOTO 撮影禁止」とか、「写真を撮るなら TIP チップを出せ」といった看板もあったようですからね。知らないというのは怖いものです。

### Madame Tussauds Hollywood マダムタッソー蠟人形館

アメリカンドリームの象徴であるハリウッド、そこでアメリカ映画の「憧れのスター」たちとも「共演」を果たすことが出来ましたよ。ここは、映画界のみならず、政治やスポーツまで含めた様々のジャンルのスターたちが、百体以上揃っている所なのです。話には聞いていましたが、正直なところ「ソックリ人形を見てもツマランだろう」と思っていましたね。しかし実際に入ると、実に楽しいのです。なぜなら、ここは等身大のスターたちと、ツーショット写真を自由に楽しむことができるのですよ。



私が少年時代の憧れ、ジョン・ウェインはさすがにスゴイ大男。カッコいい S・マックイーンは意外と小柄。J・ディーンや H・ボガードといった「伝説のスター」たちとも、ツーショットを楽しみましたね。妻は J・ニコルソンとの話で盛り上がり、私はスピルバーグ監督の助手にしてもらいましたよ。M・モンローや G・クーパーがいなかったのは残念でしたが、どうも時々展示の入れ替えがあるようです。正直言って、「あまり似てないね」というのもありましたが、それでも十分満足しましたね。ついでという感じで、10分程度の 3D 映像の格闘アニメを見せてくれますが、これが意外と楽しめます。映画の場面に合わせて、風が吹いたり、霧状の水がかかったり、座席が振動したり、ということが体験できるのです。これを体感型映画「4DX」というらしいですね。ヤリを突き刺す戦いの場面で、座席の背中をグイッと突かれたのには驚きました。「ここまでヤルか」という感じです。入場料は30ドル (3600 円位)、やや高いと思いますが、映画ファンならケッコウ楽しめますよ。

ロス市内の中心部ダウンタウンの駐車場に居た時にこんなことがありました。車を降りて 5 人で歩きたした時に、わたしたちに向かって白人の女が何事か言ってきたのです。顔中に刺青のある痩せた中年女。何か叫んでいるような、ワケノワカラナイ英語です。私はとっさに異様なものを感じ、「麻薬中毒！」という言葉が浮かびました。気味が悪いので、無視して離れようとしています。するとデイルが何事か彼女と話しているのです。気になって、あとで彼に聞いてみます。「何て言ってたの？」彼は吐き捨てるように She said “give me money” 「金をくれって言うんだ」



私達が大学に行った翌日に、またしても大学で乱射事件がありました。ロスではなく別の州でしたが、あんなに平和でノンビリとしたキャンパスを見たばかりだったので、信じられない思いでしたね。今のアメリカという国には、明るい「陽の部分」と同時に「陰の部分」があるのです。どの国にもそんな要素はありますが、この国はその「落差」がひどいと思いますね。ハリウッドやベニスビーチが「陽」なら、銃や麻薬は「陰」の部分というわけです。アメリカの中の「狂気」と言ってもいいかもしれません。

戦後まもなく生まれ、団塊世代と言われる私たちは、50年代から60年代にかけての、アメリカのTV番組や映画に、大きな精神的な影響を受けているはずです。当時の日本は、まだまだ貧しい時代でしたから、大きなアメ車と大きな冷蔵庫、そして広い駐車場のあるスーパーなどに、私たち日本人は驚き、憧れたものです。私が一番印象に残っているのは「Sing along with Mitch ミッチと歌おう」という番組ですね。私の記憶では、中学生の頃の番組で、日曜の午後に放映されていたと思います。髭のオジサン Mitch Miller ミッチ・ミラーとその合唱団が、古い米国民謡などを歌い上げ、バックで女性ダンサーが踊る、という比較的地味な番組でした。私は毎回見ていましたが、歌がいいからというより、合唱団の男性が歌手と思えないほど実に逞しく、金髪のダンサーはとても魅力的で、とにかく陽気で明るいのですよ。「アメリカってエエなあ。いつか行って見たいのう」などと、当時「思春期」であった私は思っていましたね。

「古き良き時代のアメリカ」では、ほとんどの市民が「豊かな中産階級」でした。しかし、現在のアメリカは極端な「格差社会」と言われています。あるTV番組によれば、「人口の10%の富裕層が富の70%を所有している」といいますし、「400人の超富豪が所有する資産が、1億5千万人の収入と同じ」だとする、信じがたい数字もあります。日本でもこれほどではないにしても、正社員と派遣、大企業と中小企業の賃金格差は、社会問題となっています。「格差」の問題だけでなく、「9・11」から続くテロとの戦い、地球の温暖化と災害の多発、巨大地震の不安など、米国と日本は、ほとんど同じ困難と問題を、将来に向けて持っていると言えるでしょう。



私は今 66 歳、妻は 65 歳、Leonard レナードは私と同じ 66 歳、妻の Marsha マーシャは 64 歳、そして Dale デイルは 71 歳で、妻の Violeta ビオレッタは 54 歳です。彼らは米国人として生まれ、これまで生きてきました(ビオレッタの場合は少し複雑ですが)。同様に、私たちは日本で生まれ、この国で生きてきました。しかし、私たちはほぼ同じ年齢ですから、これまで同じ時代を生きてきた、ということなのです。人と人のつながりに、国の違いや、離れている距離など大したことではないという気がしますね。隣に住んでいても、顔も知らないし、挨拶もしないということがありうる時代です。ましてや、英語と日本語という「言葉の壁」など小さなことかもしれません。お互いの気持ちが通じ合え、心の結びつきが持てることの方が大切です。これからお互いの「残された人生」を、ともに歩んでいきたいと思いますね。

5 年前に東日本大震災があった時に、マーシャとビオレッタから手紙がきました。「大丈夫ですか?」「何か私達に出来ることはありませんか?」という文面でした。米国から見ると、日本全体が地震の被害に遭ったように感じたようです。その手紙の最後にこんな言葉が添えてありました。

Don't forget your friend in the United States (アメリカに友だちがいることを忘れないでね)

「世界の何処に行っても、安心して暮らせるトコはないような、エライ世の中になって(もうとるんじゃが、こういう時こそ友達を大事にしたいもんよのう)」